**宸殿**

宸殿は17世紀半ばに皇室から仁和寺に寄贈されたが、その本来の建物は1887年の火事で焼失してしまった。現在の建物は1914年に建造されたものです。この建物は主に儀式や祈祷のために使われていた。再建は、皇室の建築の伝統に忠実にしたがっている。例えば、ヒノキの樹皮を使った檜皮葺きの入母屋屋根は、特に京都御所で国家行事を行う際に使われた紫宸殿の建築様式と関連づけられている。宸殿には3つの部屋があり、そのそれぞれに原在泉（1849〜1916年）による襖絵がある。原在泉は有名な原派に属する絵師の一人である。原派は江戸時代（1603〜1868年）の後期に創設された流派であり、皇室お抱えの絵師集団として、特に御所の襖絵を描いたことで知られている。再建された宸殿は基本的にもともとの建物のコピーなので、原派の4代目の当主であった原在泉がここの襖絵を担当するのがふさわしいと考えられた。襖には古典的な日本の四季が描かれていて、早春の芍薬や秋の鴨などの典型的なモチーフを見ることができる。